

平成29年2月3日、政策秘書課職員と話した内容です。

人生100年

全国の約8割の自治体で、人口が減り始めています。そうした自治体の多くは、人口は減っても、住民同士のつながりが残っています。一方で、長久手市は、この50年弱の間に一気に5万人近く人口が増えました。区画整理により住環境が整ったのと同時に、昔からの地縁は薄れました。多くの方が、本市の住みよさに共感して、越してきてくださいますが、互いに関係性はなく、住民同士のつながりは希薄になってしまったと感じています。

本市においても、孤立死や虐待、DVなどの問題が起こっています。行政は、問題が起きて、連絡があってから対応することはできますが、問題が起こる前に発見し、対応することはなかなか難しいものです。行政だけでは、対応や解決できないことが、たくさんあります。長久手に住む人同士で、市民として何ができるのか、自分だったら何ができるのか、考え始めていただきたいのです。

厚生労働省発表の平成27年簡易生命表によると、90歳まで生きる確率は、現在、男性は4人に1人、女性は2人に1人だそうです。医学の進歩で、今の子ども達は100歳まで生きるのが当たり前になっているかもしれないと言われています。

私たち大人は、子ども、孫たちの将来を思うならば、目先のことだけでなく、2100年までを想像することが必要な時代になったのかもしれないかもしれません。100歳までの人生をどう生きるのか想像し、退職後も元気で、役割と居場所を持って暮らせる仕組みを作っていかなければなりません。

いよいよ、次の10年間のまちづくりの指針となる、次期総合計画の策定作業が、本格的に始まります。

昭和49年に初めて策定した総合計画から、現在の第5次総合計画まで、すべてに「市民参加」と書かれています。市民参加は思うようには進んでいません。

100年の人生を想像し、新たな仕組みを作っていくには、行政だけの発想では、太刀打ちできません。市民のみなさんの豊かな発想が必要です。

今、長久手市には、65歳以上の方が9,000人いらっしゃいます。2050年には、今の倍の2万人になると予測しています。この方達が、寝たきりにならないために、住み慣れた地域でいつまでも元気で暮らし続けられるためには、子ども達が大人になったときに、安心して暮らしていける長久手にしていくにはどうしたらいいか、今から考えていきましょう。

～市長の話を聞いて～

「何歳まで生きるって思う？」と聞かれると、40代の私は「70歳くらい」と答えま
す。同じ職場の30代に聞いてみたら、「62、63歳くらいで、それ以上は想像できない」
という回答が返ってきました。

先日、大学生に同じ質問をしたら、間髪入れず「100歳」と返事が返ってきて、驚き
ました。自分と同じ年代の考え方だけで未来を描いてはいけないと思いました。